The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	他者からの役割期待が自己認知にもたらす影響
Author(s)	倉元, 俊輝; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 169-177
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9437
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 10, 2010

他者からの役割期待が自己認知にもたらす影響

倉元俊輝(大阪大学大学院人間科学研究科)
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、社会的場面で役割を担う個人が、他者からの期待を受けた行動を行うときに自己認知に生じる影響を検討したものである。社会的場面の現実性を勘案し、他者から期待される役割が自分にとって望ましくないものであるという状況を取りあげて、実験的に検討した。「教師が学習成果について学生に評価的なフィードバックを与える」場面を作成し、参加者を教師役とする実験を行った。そして、教師役(ネガティブ評価・ニュートラル評価条件)と他者からの期待の有無を独立変数として操作した。対象者は 63 名の女子大学生であった。従属変数として、Big Five・自己受容性尺度を採用した。また、相互作用後に他者の印象も測定した。実験の結果、他者からの期待の有無により、特定の役割を担う際に生じる自己認知の変容の側面が異なることが判明した。この原因について、参加者を取り巻く状況と期待の機能の観点から考察を行った。

キーワード: 自己認知、役割、役割期待、認知的不協和

問題

本研究の目的は、役割への期待が自己認知にもたらす影響を検討することにある。具体的には、役割期待を受ける状況を実験的に作成し、それが実験前後での自己認知にどのような影響をもたらすかについて検討を行った。

関係性が自己認知の形成に影響をもたらすことは社会心理学分野で古くから研究されてきたテーマである。例えば、Cooley(1902)は自己意識と他者との相互関係に対する意識が密接に関連すると主張している。また、Mead(1934)は、人は集団・共同体に所属し、そこに所属するメンバーの態度を自分の中に受け入れることで、「一般化された他者」として内在化し、その過程を経て自己を形成すると主張する。

人はこのような過程を経て内在化された自己認知を維持するために自己と一貫性のある情報を求めるという。Swann & Read(1981)は、自己確証過程理論において、自己のイメージを確立した人物は社会的環境に対して自己認知を反映するように働きかけると主張する。すなわち、人は自己認知について一貫性を保とうとする欲求を持ち、そのために外界に働きかけるのである。

とはいえ、さまざまな社会的場面や相互作用を経験すると、今までに認識していない自己の側面を発見することもある。「セルフ・イメージは生涯を通じて変容していくもの」(岩熊・槇田, 1991)というように、自己認知は安定するだけでなく、時に変容をともなう。

しかしながら、そこには一貫性と変容という矛盾が存在する。そして、この状況は人に葛藤を経験させると考えられる。例えば、他者から自分が思っているパーソナリティと正反対の評価を受けたという状況を想定する。自己認知とのズレに直面する状況で、不一致の評価に対する戸惑いが生じるのではないだろうか。自己の正確な認識が精神的健康に関係する(遠藤, 1995)という指摘からも、不一致状況に対する適切な対処が精神的健康に影響することが考えられる。

下斗米(1990)は自己認知の不整合事態における対処方略を検討している。その方略を大別すると 2 種類存在する。第一に否認・回避の方略である。その行動は、評価した他者との関わり合いの減少、その評価の無視や否定、その現状の回避などが挙げられる。すなわち、評価や葛藤場面を回避する方向性に進むのである。

第二の対処方略は自己認知と、他者による不一致の評価との間で折り合いをつける受容の方略である。これは現在の自己認知と評価を融合し、認知を再体制化する方略である。具体的に、下斗米(1999)では相互作用場面で他者からの評価が自己認知に与える過程、つまり受容方略を分析し、自己高揚、自己体系化、自己混乱、自己発見、自分らしさの了解の類型を見出している。

下斗米の主張する対処方略のいずれが採用されるかは、自己の一貫性を乱す状況に起因する。例えば、その状況が自分にとって重要でない場合は、再体制化がとられることは少ないと考えられる。なぜならば、自己と他者評価のズレを否認・回避する方略をとる方が相対的に容易なためである。しかし、その状況が重要な場合、否認・回避方略は関係の放棄につながるリスクを孕むため行われにくいと考えられる。下斗米の研究で、相互作用相手が重要な相手であり、積極的な関わりが必要とされるほど、自己体系化が促進される傾向が示されている。また、Festinger(1957)の認知的不協和理論では、不協和を解消する 3 つの過程が示されている。第一は自己の認知の変容、第二は状況の変容、第三は新情報の付加である。彼の主張する過程も状況によって変化すると考えられる。このように、社会的な自己を考える上では、関係性を踏まえた変容過程を捉えることが重要である。

昨今、新卒の社員が会社に馴染めず、早々に退職するという問題がしばしば話題になる。集団への所属は、社会的な関わりを通じて個人が自己の変容を経験する場である。しかし、この事実からすると変容を受容できない事態が生じているのではないかと推測される。関係性によって自己が変容することが、個人にとって適応的であるか否かについては意見が分かれる(佐久間・無藤, 2003)。しかし、少なくとも集団に所属することで、社会的役割や地位が社会的構造の一部分として付与され、自己の変容を受け入れざるを得ない状況があるのも事実である。このことを考えると、社会的役割を内在化する過程を捉えることは大きな意味をもつと言える。

ところで、役割は他者(社会)の期待に基づいている。期待のもつ機能は以下のように考えられる。第一の機能は、自己を客観的に見る視点の獲得である。他者からの期待に応じるには自分の評価を把握することが必要となるからである。崔・狩野(1984)は、他者の期待による自身の行動の変化を認識することが自己認知に影響することを指摘している。

第二に期待が社会的な承認を与えることである。社会的な要請を内在化する過程で人は社会の一員となる。期待は社会的な要請と言えるため、同様の機能をもつと考えられる。この期待に基づく役割を担うことが社会の機能を促進させ、良好な関係を形成することに大きく関与している。下斗米(2000)は友人関係の親密化過程を役割期待と役割遂行のズレの観点から検討している。それによると、関係性の段階に応じて期待される役割が異なり、その役割の受容・拒否が関係の維持と葛藤の両方の要因となると言われる。

また、役割が集団に所属するためのルールを与えることは多くの研究で示されている。小平(2000)は、人が「自分はこうあるべきだ」と考える自己認知の側面である義務自己を取り上げ、義務自己の一部が役割期待によって構成されると主張する。さらに、役割期待は自己呈示の指針になると同時に、その役割を担う人物の自己呈示に対する拘束力ともなる(松本, 2002)。また、Snodgrass(1985)や Snodgrass(1992)は、上位者－下位者という役割関係における対人関係の感受性を検討した結果、下位者は、自分についての上位者の評価に敏感であることを示している。これは、上位者－下位者という役割の維持のために、従属的関係での適切な行動を選ぶ意思の表れと考えられる。これは自己呈示に役割が影響するという松本の指摘を裏付けるものと言える。

以上のように、社会の中で獲得される諸々の役割は個人の行動や認知に影響を与えるものである。加えて、それを担うことで社会が機能する。これらの特性を考えると、役割とは社会という場の中に個人を組み込むためのシステムであると考えることができる。

本研究の目的

役割は自己に対して拘束力を持っている。また、現実では時として自分に向かない(と思っている)役割が与えられることもある。その役割を回避することが損失をもたらす場合や役割が重要である場合には、たとえその役割のイメージと自己認知との間に不一致を感じていても、役割を回避することはせず、受容すると考えられる。しかしながら、自己認知と不一致な役割を担うことは当人にとって不快な事態である。それでは、その役割を受容する場合にはどのような心的過程が生じるのであろうか。この問いに対して Zimbardo, Haney, Banks, & Jaffe(1977)や Milgram(1974)の有名な実験は興味深い示唆を与えている。Zimbardo らの実験は役割とそれにより構成される場の中に人が組み込まれていく過程を示す例である。また、Milgram の服従実験は、役割をテーマにしていないものの、その場での役割を受け入れることで非情な決断さえも可能にする過程を見ることができる。

しかしながら、彼らの実験は現実場面での応用は難しい。また、役割を通じて、個人の内面に生じた変化については十分に言及されていない。

これらの諸点を踏まえながら役割を検討する。特に、自分に適さない役割を自己に受容する過程を設定する。そして、その過程で自己認知に生じる変容を検討することを目的とする。具体的には、実験場面で個人に内容を操作した役割を与え、その前後における自己認知の変化を検討する。

先に挙げたように、役割は社会的な期待によって構成されるものである。また、他者からの期待は行動や自己概念に影響する(崔, 1985; 崔・狩野, 1984)ことから、他者からの期待が役割において重要な意味をもつことが示唆される。そこで本研究では期待の操作も行った。

方法

予備調査

本実験の学習実験場面では、教師役(実験参加者)が学生役(実験協力者)に学習結果に関して評価的フィードバックを与える状況を作成する。そこで、学習実験場面で使用するフィードバック文章を選定するため、予備調査を実施した。

方法 関西地区の男女大学生・大学院生 40 名(女性 30 名, 男性 10 名; 平均年齢 22.68 歳, *SD* = 6.76)を対象とし、授業終了後に質問紙に回答を求めた。

調査は場面想定法を用いた。調査参加者には本実験と同様の状況を想定し、質問紙への回答を求めた。具体的には、参加者は自分が教師となり、生徒に対して学習結果に関する評価的フィードバック(3 種類)を行う状況の

想定を求めた。

質問紙の内容に関しては、本実験で使用する候補となるフィードバックの文章3種類のそれぞれについて、3項目(ネガティブさ、抵抗感、攻撃性)の質問項目を設定し、7件法でそれぞれの程度の強さについて回答を求めた。

結果 それぞれの項目に関して 1 要因分散分析を実施した(Table 1 を参照)。その結果、いずれの項目においても文章における有意差がみられた(ネガティブさ: $F(2, 78) = 60.31$, $p < .001$、抵抗感: $F(2, 78) = 81.89$, $p < .001$、攻撃性: $F(2, 78) = 88.23$, $p < .001$)。さらに、Turkey 法による多重比較を実施したところ、文章 1、3、2 の順に値が高く、3 つの文章のいずれの間にも有意差($p < .05$)がみられた。

この結果を踏まえ、3 つの文章のうちいずれの項目においても有意に大きな値を示した 1 番の文章をネガティブ刺激として設定し、2 番の文章をニュートラル刺激として設定した。その内容については以下のとおりである。

「～さんの結果が出ました。～さんの結果は 20 問中 12 問正解でした。これは一般的な大学生の平均的な結果を 2 ~ 3 割程度下まわります。平均をこれほど大きく下まわる学生はあまりみられません。これは根本的に認知に関わる能力が低いか、実験に対して真剣に取り組まれなかったかどちらかに原因があります。ちなみに同様の課題を使ったアメリカの過去の研究では、平均を大きく下まわった大学生は 1 割に満たない程度で、その大半が成績下位得点者であり、素行も問題視されている学生でした。」

以上はネガティブな役割条件のフィードバック文章の一部である。なお、ニュートラルな役割条件では全体的に中間的であるという旨の文面になる。

Table1 フィードバック文章の評定値の比較

項目	文章					
	1		2		3	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
ネガティブさ	6.25	1.08	2.93	1.53	5.50	1.18
攻撃性	6.13	1.24	2.53	1.62	5.35	1.17
抵抗感	6.28	0.99	2.78	1.59	5.48	1.18

本実験

実験参加者および実験デザイン 実験参加者は関西地区の女子大学生63名(平均年齢18.70歳, $SD = 1.07$)であった。本実験では、役割の操作を確かなものにするため、女子学生のみを実験参加者とした。女性は、男性よりも関係性を意識しやすく、役割の影響もより強く捉えると考えられるためである。この考えは、女性は男性と比較して自己概念の中核に「他者のまなざし」の影響が存在する(梶田, 1988)という指摘や、女性は対人的な側面や社会的属性が自己概念に影響する(山本・松井・山成, 1982)という指摘に依拠している。なお、実験参加者には募集時に自己認知に関する質問紙の回答を求めた。

本実験では学習実験場面を設定し、実験参加者が教師役を、実験協力者が学生役を務める状況を作成した。これらの実験場面の作成にあたっては Wish, Deutsch, & Kaplan(1976)の対人関係の認知に関する研究を参考した。彼らによれば「教師－学生」関係はフォーマルな関係として認知され、その関係性は平等ではないと認知されるという。本研究は実際の役割を扱うことを目的としており、参加者にとって「教師－学生」の役割はイメージを想起しやすいと考えられるため、これらを採用した。

実験計画は 2(教師役の質: ニュートラル(neut)、ネガティブ(nega)) × 2(役割期待の有無)であり、実験参加者をいずれかの実験条件にランダムに割り当てた。期待については、実験者が実験参加者に役割遂行への期待をかける条件(期待有群)と特に何もしない条件(期待無群)を設定した。役割については、教師役が行う学習結果のフィードバックがネガティブな条件とニュートラルな条件を設定した。

手続き 参加者には「学習課題に対するフィードバックと学習意欲の関連を問う実験であり、実験参加者は教師か学生のどちらかに割り振られる」というカバーストーリーを教示し、教師役を依頼した。以上の教示終了後、本実験で務める役割(neut・nega 条件)の教示を行った。

次に役割期待に関する操作を行った。期待有群の場合には、実験者は教師役である参加者に対して期待する旨の言葉をかけたが、期待無群では期待する旨の言葉はかけず、リラックスするように教示した。具体的には、期待有群では「この研究では教師役の行動が非常に重要な役割を担っていますので、研究を良いものにするためにも役になり切ってもらうようよろしくお願いします」という言葉をかけた。対して、期待無群には「この研究では教師役の行動が重要な役割を担っているように感じるかもしれませんが、それほど気になさらず役をやってもらうようよろしくお願いします」という言葉をかけた。

学習実験課題は、対呈示される形容詞と単語を記憶し、呈示終了後に出される形容詞とペアになる適切な単語を回答するものであった。なお、今回使用した課題は実際に知覚や記憶を計測するものではなく、視覚を用いた課題を利用することで、実験参加者に実験の真の狙いを気づかせないことを目的としていた。

この課題は 20 問の構成であり、解答終了後、その解答を参加者が採点した。ただし、協力者は常に 12 問正解するように解答が教えられていた。採点後、教師役は学生役の学習課題の結果にフィードバックを行った。

その後、実験参加者と実験協力者の両者に質問紙の回答を求めた。回答終了後、実験参加者に謝礼を渡し、実験を終了した。

従属変数 役割を自己に受容する過程を捉えることを目的としているので、募集時と実験後の自己認知を従属変数とした。自己認知の尺度として、役割を務めるにあたって他者から期待される程度が高いことが示唆されている情緒不安定性・誠実性・調和性(吉田・高井, 2008)をBig Five(和田, 1996)から採用した。

さらに、宮沢(1988)から自己受容性測定尺度(SAI: 4因子、全27項目)を使用した。自己認知に不一致な側面と直面する状況において、受容方略は社会的な機能を維持し、集団の関係を良好に保つために重要な意味合いをもつことが指摘されている。本実験のように、自身に望ましくない役割を担う状況では、それを受容できるか否かが重要なポイントとなることから採用した。

さらに、実験後の質問紙では生徒役(実験協力者)に対する印象として、印象評定項目(18 項目: 大坊(1978)による)とフィードバックの「しやすさ」に関する 1 項目、そしてダミー項目(2 項目)を含めた操作チェック項目(4 項目)と実験の意図の理解を問う項目(1項目)を使用した。他者の印象を採用した理由は Milgram(1965)の実験に由来する。服従実験の参加者の幾人かは電気ショックを与える正当な理由があるように受け手を否定的に評価していたのである。このことから本実験においても、役割の行為を正当化するために学生役を否定的に捉える可能性があると考え検討を行った。すべての項目に関して 7 件法であった。

結果

操作チェック 「実験での役割をうまく行うこと期待されている気がした」とする旨の質問項目について、期待有群(M = 5.35, SD = 1.11)と期待無群(M = 4.00, SD = 1.65)において有意差がみられ(t (61) = 3.82, p < .001)、期待の操作は十分になされていたと言える。

また、教師役の担うフィードバックについては、行動のネガティブさ、役割を演じる気分、相手に否定的な印象を与えている程度について、nega 群と neut 群の間で比較した。その結果、ネガティブさに関して、nega 群(M = 5.00, SD = 1.24)と neut 群(M = 3.45, SD = 1.29)で有意差がみられた(t (61) = 4.86, p < .001)。さらに、気分(高得点ほど否定的)では、nega 群(M = 5.59, SD = 1.27)と neut 群(M = 2.84, SD = 1.53)で有意差がみられた(t (61) = 7.80, p < .001)。そして、否定的な印象に関しても、nega 群(M = 6.25, SD = 1.11)と neut 群(M = 3.06, SD = 1.30)で有意差がみられた(t (61) = 9.34, p < .001)。これらの結果から両条件を独立変数として、以後の分析を行った。

自己認知の変容の検討

まず、独立変数によって自己認知にどのような影響が生じているかを検討した。特に、実験前後で自己認知がどのように変化しているかを中心に検討した。

Big Five の 3 因子(情緒安定性・誠実性・調和性)、自己受容性尺度の 4 因子(自己理解・自己承認・自己価値・自己信頼)を因子ごとに質問項目の得点を合算して算出した(因子合成得点)。それらを従属変数とし、参加者間要因として期待条件と役割条件、参加者内要因として実験の前後の条件を加え、2(教師役の質: ニュートラル(neut), ネガティブ(nega)) × 2(役割期待: 有, 無) × 2(実験前後: 前, 後)の 3 要因分散分析を実施した。

なお、Big Five は形容詞項目であり、パーソナリティ特性を表すものである。一方で、自己受容性尺度は自分自身に対する態度を表すものである。以下では両者を分けて述べていくこととする。

パーソナリティ特性についての検討 Big Five の 3 因子のそれぞれを従属変数として分散分析を行った(平均値と標準偏差は Table 2 を参照。数値は質問項目の合計得点を表す)。

情緒安定性について、2 次の交互作用に有意な傾向がみられた(F (1, 56) = 2.89, p < .10)。さらに単純交互作用の検定を行ったところ、nega 条件において期待の有無と実験前後の単純交互作用がみられたため、単純・単純主効果の検定を行った。その結果、期待有かつ nega 条件において実験前後に有意差が確認された(F (1, 56) = 5.69, p < .05)。

誠実性について、実験前後の主効果(F (1, 59) = 3.47, p < .10)と、2 次の交互作用(F (1, 59) = 3.47, p < .10)にそれぞれ有意な傾向がみられた。単純交互作用の検定を行った結果、nega 条件において期待の有無と実験前後の単純交互作用がみられたため、単純・単純主効果の検定を行った。その結果、期待有かつ nega 条件において実験前後に有意差が確認された(F (1, 59) = 6.95, p < .05)。

調和性因子ついては実験前後の主効果(F (1, 58) = 3.25, p < .10)と、期待と実験前後の交互作用(F (1, 58) = 3.88, p < .10)に有意な傾向がみられた。単純主効果の検定を行った結果、期待無群における実験前後の単純主効果が確認された(F(1, 58) = 7.11, p < .01)。

これらのことから、まず、他者からの期待をともないネガティブな役割を担う場合に、情緒安定性は肯定的に変容する傾向がみられた。それに対し、誠実性に関しては否定的な変容する傾向がみられた。このことから、ネガティブな役割であっても、他者からの期待が存在することによって、自分の情緒的な安定性を高く評価する可能

Table 2 各パーソナリティ変数の平均値と標準偏差

	期待	役割	実験前	実験後
			$M(SD)$	$M(SD)$
情緒安定性	有	nega	37.86 (8.63)	41.29 (11.62)
		neut	38.64 (14.56)	39.50 (13.48)
	無	nega	41.31 (19.71)	40.00 (17.81)
		neut	38.06 (9.88)	39.06 (11.26)
誠実性	有	nega	50.69 (9.69)	47.81 (7.12)
		neut	47.67 (10.09)	47.67 (7.75)
	無	nega	46.00 (9.22)	46.00 (10.31)
		neut	45.31 (8.48)	44.13 (9.34)
調和性	有	nega	55.94 (9.18)	54.88 (9.78)
		neut	51.79 (11.99)	52.64 (10.99)
	無	nega	52.75 (10.10)	55.63 (10.60)
		neut	53.63 (7.44)	55.38 (8.69)

性が示唆された。調和性に関しては役割の効果は確認されなかった。

自己受容的態度についての検討 自己受容性について 4 因子を従属変数とし、分散分析を行った(平均値と標準偏差は Table 3 を参照)。

自己理解因子について、実験前後の主効果に有意な傾向がみられた($F(1, 59) = 3.09$, $p < .10$)。このことから実験後に自己理解が高まる傾向が確認された。さらに、下位検定(Tukey 法)を行った結果、nega 条件における実験前後の主効果に有意な傾向がみられた($F(1, 59) = 3.18$, $p < .10$)。つまり、ネガティブな役割を担う場合に、実験後に自己への理解を高める傾向がある。

自己承認因子については、実験前後の主効果に有意な傾向がみられ($F(1, 58) = 3.09$, $p < .10$)、さらに役割条件と実験前後の交互作用($F(1, 58) = 5.19$, $p < .05$)と 2 次の交互作用($F(1, 58) = 5.45$, $p < .05$)が確認された。単純交互作用の検定を行った結果、期待無群における実験前後の主効果が有意であった($F(1, 58) = 5.19$, $p < .05$)。また、期待有群における役割条件と実験前後の単純交互作用が確認されたため、単純・単純主効果の検定を行った。その結果、期待有群かつ nega 条件で実験前後に有意差があり($F(1, 58) = 4.12$, $p < .05$)、さらに期待有群かつ neut 条件でも実験前後に有意差が確認された($F(1, 58) = 6.67$, $p < .05$)。これらの結果から、期待無群や期待有かつ neut 条件では、実験後に自己承認が高まるのに対し、期待有かつ nega 条件では実験後に自己承認を否定的に変容させていた。つまり、期待を受けずに役割を担う場合には、役割の質に関わらず、自己承認が高まることが判明した。一方で、期待がある場合には、役割によって自己承認の変化の方向性が異なっていた。

自己価値因子については実験前後の主効果($F(1, 58) = 37.13$, $p < .001$)と 2 次の交互作用($F(1, 58) = 4.64$, $p < .05$)が確認された。単純交互作用の検定を行った結果、neut 条件において期待条件と実験前後の単純交互作用と、期待有群において役割条件と実験前後の単純交互作用、実験後において期待条件と役割条件の単純交互作用が確認されたため、単純・単純主効果の検定を行った。その結果、実験後の neut 条件で期待の有無における有意差($F(1, 58) = 7.24$, $p < .01$)、実験後の期待有群で役割条件における有意差($F(1, 58) = 28.20$, $p < .001$)、実験前の期待無群で役割条件における有意差($F(1, 58) = 5.98$, $p < .05$)、期待有かつ neut 条件における実験前後の有意差($F(1, 58) = 24.65$ $p < .001$)、期待無かつ neut 条件で実験前後の有意差($F(1, 58) = 5.93$, $p < .05$)、期待無群かつ nega 条件で実験前後の有意差($F(1, 58) = 10.79$, $p < .001$)が確認された。これらより、ニュートラルな役割を担う場合は、期待の有無によらず、自己価値を高めることが示された。ただし、期待に依存しないが、期待がある方が、自己価値をより高く評価することも示された。

Table 3 各受容的態度変数の平均値と標準偏差

	期待	役割	実験前	実験後
			$M(SD)$	$M(SD)$
自己理解	有	nega	36.75 (6.89)	38.88 (5.37)
		neut	38.53 (8.77)	39.20 (8.14)
	無	nega	38.88 (6.84)	40.19 (8.35)
		neut	41.13 (5.62)	41.81 (7.07)
自己承認	有	nega	26.94 (5.64)	25.31 (4.66)
		neut	24.40 (5.68)	26.47 (6.17)
	無	nega	24.44 (6.28)	25.75 (6.91)
		neut	25.67 (5.56)	26.93 (6.36)
自己価値	有	nega	29.69 (7.67)	31.00 (8.31)
		neut	30.47 (5.90)	34.80 (4.84)
	無	nega	29.00 (8.57)	31.87 (7.71)
		neut	30.75 (9.73)	32.88 (8.78)
自己信頼	有	nega	31.63 (6.52)	33.44 (5.59)
		neut	30.67 (7.62)	31.93 (7.11)
	無	nega	31.13 (6.17)	31.40 (7.43)
		neut	32.00 (4.76)	32.50 (5.05)

自己信頼因子については実験前後の主効果($F(1, 58) = 4.21$, $p < .05$)が確認された。実験後に自己への信頼が肯定的に変容することが明らかとなった。下位検定(Tukey 法)の結果、期待群における実験前後の単純主効果が確認された($F(1, 58) = 5.80$, $p < .05$)。つまり、他者からの期待を受けることで、自己への信頼を高めることが明らかとなった。

他者認知に関する検討

本研究では教師役からの学生役に対する印象にも回

答を求めた。

分析は、2(教師役の質: ニュートラル(neut), ネガティブ(nega)) × 2(役割期待: 有, 無)を独立変数とし、印象を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。

他者への印象　今回使用した大坊(1978)による印象の評定尺度は、明朗性･活動性･魅力性･包容性･親和性･信頼性の 6 因子に分かれる。それぞれに分析を行った。その結果、魅力性因子に関して、役割条件の主効果が確認され(Figure 1 を参照)、nega 条件において neut 条件よりも有意に低い評価がみられた(F (1, 59) = 7.30, p < .01)。

このことから期待に関わらず、ネガティブな役割を担う時には、ニュートラルな役割を担う場合と比較して、相手の魅力性を低く評価することが分かった。

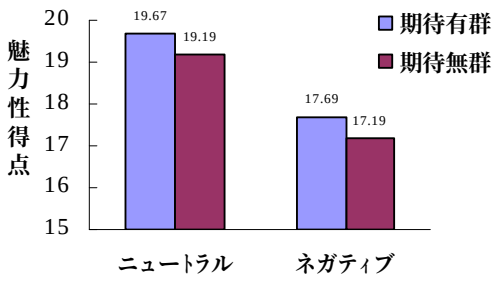

Figure1 参加者による学生役(協力者)の魅力性評価の比較

フィードバックのしやすさ　本実験では役割の担うフィードバック行為のしやすさについて回答を求めている。これを従属変数とし、2(教師役の質: ニュートラル(neut), ネガティブ(nega)) × 2(役割期待: 有, 無)を独立変数とした 2 要因分散分析を行った。

その結果、役割の主効果(F (1, 59) = 20.82, p < .001)と、期待の主効果(F (1, 59) = 8.04, p < .01)が確認された(Figure 2 を参照)。このことから、ネガティブな役割の場合にニュートラルな役割よりも、相手に対して評価的フィードバック行為をしやすく感じていた。同時に、期待を受けない場合に期待がある場合よりもしやすいと感じていた。

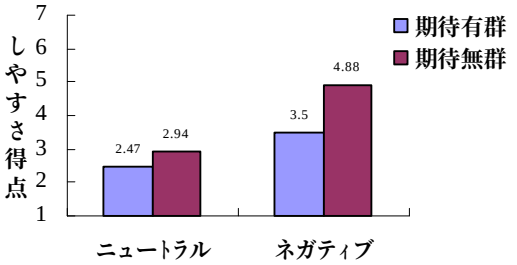

Figure2　参加者による学生役へのフィードバックのしやすさ評価の比較

考察

実験場面で参加者は、協力者と「教師ー学生」関係を共有する。そして同時に、期待を与える実験者との間にも上下関係を結んでいる。実験者と参加者の関係は、参加者の行動は実験者により制限されており、参加者はその指示に従う以外の選択肢を持たないことから推測される。この状況では、参加者にとっては上位者である実験者の行動に注意を払うと考えられる。これは下位者が上位者の行動に敏感である(Snodgrass, 1985, 1992)という指摘からも言える。このように考えると、この関係構造において実験者が与える期待は参加者にとって注視すべき対象となりうる。

これらを踏まえると、期待の有無によって、個人内で生じる過程が異なることが推測される。すなわち、期待がある場合、他者からの評価に関心が高まることで、他者からみられる自身の行動に注目する。一方で、期待がない場合には、相対的に自分の内面への注意を向けるようになる。それが自己認知の側面の変容に関与すると考えられる。これに基づいて、自己認知について考察を行う。

パーソナリティ特性の側面

得られた結果をまとめると以下のようになる。他者からの期待をともない、ネガティブな役割を行った場合には、情緒的安定性は高まるが、一方で誠実性に関しては低下する傾向が確認された。また、役割に関わらず、期待を受けない場合には、調和性が高まる傾向がみられた。

まず、前者の状況は参加者にとって不協和な状況と言えよう。なぜならば、ネガティブな行為をすること(参加者にとってマイナス)が社会的な承認を受ける(参加者にとってプラス)状況であるからである(Figure 3)。

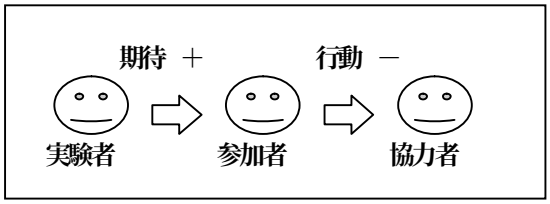

Figure 3 参加者を中心とした実験場での関係性
他者に対する働きかけの観点から

その不協和事態を脱するために認知の変容が生じたと考えられる。つまり、期待の価値を高めることで、ネガティブな行為をすることに認知的な整合性を持たせたと考えられる。そして、それが情緒的安定性に影響したと考えられる。すなわち、期待の価値の高まりが社会的承認をより強く顕在化させた。そして、それが社会的に受容されているという感覚を生み出したため、情緒的安定性が高まったと考えられる。

誠実性が低まったことに関しても、期待が自身への客

観視を高めたことが原因と考えられる。期待による自己の客観視が学生役に対するネガティブな行動を顕在化させ、その結果として低下したと考えられる。

これらの傾向は、同じ条件でも因子によって異なる結果が生じた。これは、自分自身にのみ関わる情緒安定性と異なり、誠実性は他者に対する行動と関係する。その違いが、結果の違いとなって表れたと考えられる。

ただし、調和性については役割によらず、期待がないことが変容と関連していた。期待がない場合には、より内面に注意が向くと考えられる。そのような状況で「自分は調和的だ」と考えることで、ネガティブな行動をするという不協和を解消したと考えられる。

さらに、Donahue & Harary(1998)は関係崩壊の可能性が予期される状況で、脅威を感じることが調和性に影響すると指摘している。実験状況におけるつながりは決して強いつながりではない。一方で、実験で担う役割は重い。つまり、この不協和を孕んだ状況も調和性を喚起させる要因を担っていたと考えられる。

態度的側面

期待があることによって役割行動後に高まった自己信頼因子については期待の機能と言える。すなわち、他者からの承認を得られるということが自己に対する信頼感を高めたと考えられる。

これに対し、自己承認因子では、期待がない場合に役割にかかわらず高まった。これは調和性の解釈と同様と考えられる。すなわち、期待がないことでより内面に焦点化し、他者から承認を得られないことに、自分で承認することで不協和事態に対処したと考えられる。

ただし、自己承認因子では期待がある場合に役割によってまったく逆の結果が得られた。ニュートラルな役割の場合に自己を承認する態度が高まったのに対し、ネガティブな役割の場合に、承認する態度が低下した。

自己を承認する態度は、情緒安定性に近いと考えられる(本研究における自己承認因子と情緒安定性の相関係数: $r = .56$, $p < .001$; 自己承認因子と誠実性の相関係数: $r = .20$, *ns*)。安定性に近似しているならば、同じ状況下で自己を承認する態度は高まると考えられるが、結果的にそうではなかった。これについては十分な考察ができていないが、自己を承認する態度も他者と関係するからこそこのような結果になったのかもしれない。

自己価値因子についてはニュートラルな役割にのみ、自己の価値を高めるという結果が確認された。ただ、ニュートラルな役割においても期待がある場合に、ない場合と比較して有意に高くなったことから、社会的承認が存在することが自己価値をより高めると推測された。

最後に自己理解因子では期待によらず、理解が高まった。結果的には、期待に依存しなかったものの、期待がある場合には社会的承認をともなう理解の高まりが生じたのに対し、期待がない場合には自己の内面の不協和低減の結果であると考えられた。

他者認知の側面

ここまで自己認知について記述したが、その変容過程を補うものとして、他者認知の側面から考察を行う。

結果では、ネガティブな役割の場合に他者の魅力を低く評価し、ネガティブなフィードバックほどしやすいということがわかった。ネガティブなフィードバックをすることは、学生役に原因があるわけではないため、参加者にとって不協和な行動である。そこでその事態を対処するため、相手に対する認知を低下させたと考えられる。つまり、自分の行動は変容不可能であるため、相手に対する認知を変化させたのである。この結果は、特にネガティブな役割において、自分の行動の後ろめたさを軽減する目的をともなっていたと考えられる。

まとめ

本研究の結果から期待の有無によって変容する側面とそのメカニズムが異なることが推測された。そして、他者からの期待がある場合には自己の客観視と社会的承認が導かれ、それらが役割をともない、自己認知の変容に影響することが考察された。一方で、期待がない場合には、より自己の内面に注意が向く傾向がみられ、内面的に不協和を解消するよう機能することが考察された。

自分にとって好ましくない役割であっても、他者から期待を受けることで、肯定的に受け入れることが可能となることも示唆された。一方で、興味深いのは期待がない場合にも、自己認知の側面が高揚したということである。これは下斗米(1990)のいう受容方略と考えられ、受け入れざるを得ない状況では、自己を変容させてでも対処するという結果の表れと言える。

最後に本研究の展望と問題点について言及する。本研究は一回限りの実験である。実際のフィールド調査により、職場などでの役割を縦断的に捉える必要があろう。

また、本研究の対象者は女性のみであり、役割の種類も教師―学生と限定的である。このことに関しては、同様の研究を男性にも行うことで結果の一般化をはかる必要もあろう。以後の研究の課題として残る。

引用文献

Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Soribner's.
(クーリー, C. H. 大橋 幸・菊池美代志(訳) (1970). 社会組織論 青木書店 第1-3章)

大坊郁夫 (1978). 3者間コミュニケーションにおける対人印象と言語活動性 実験社会心理学研究, **18**, 21-34.

Donahue, E. M., & Harary, K. (1998). The patterned inconsistency of traits: Mapping the differential effects of social roles on self-perceptions of the Big

Five. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 610-619.
遠藤由美 (1995). 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, **11**, 134-144.
Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Evanston, IL: Row & Peterson.
(フェスティンガー, L. 末永俊郎(監訳) (1965). 認知的不協和の理論 社会心理学序説 誠信書房)
岩熊史朗・槇田 仁 (1991). セルフ・イメージの発達的変化 ―WAI 技法に対する反応パターンの分析― 社会心理学研究, **6**, 155-164.
梶田栄一 (1988). 自己意識の心理学 東京大学出版会
小平英志 (2000). 日本人にとって理想自己と義務自己はどのように異なる自己なのか―大学生が記述する属性ごとカテゴリーの分析を通じて― 性格心理学研究, **8**, 113-124.
松本芳之 (2002). 役割期待が自己呈示行動に及ぼす影響: 性役割期待と成功回避 早稲田大学大学院文学研究科紀要, **48**, 39-52.
Mead, G. H. (1934). *Mind, self and society : From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: University of Chicago Press.
(ミード, G. H. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収(訳) (1973). 精神・自我・社会 青木書店)
Milgram, S. (1974). *Obedience to authority: An experimental view*. New York: Harper and Row.
(ミルグラム, S 岸田秀(訳) (1995). 服従の心理: アイヒマン実験 河出書房新社)
宮沢秀次 (1988). 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, **36**, 258-263.
崔 光善 (1985). 社会的相互作用過程における期待が対人知覚の変容に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **24**, 135-141.
崔 光善・狩野素朗 (1984). 自己期待と Self-Esteem および評価的フィードバックが行動の変容に及ぼす効果 九州大学教育学部紀要, **29**, 47-54.
下斗米 淳 (1990). 社会的フィードバックへの対処方略の類型化と、その選択に関しての規定因に受けての感情が及ぼす影響 社会心理学研究, **6**, 52-61.
下斗米 淳 (1999). 社会的相互作用場面における自己概念の影響様態に関する研究―対人関係の親密化過程からの理解に向けて― 性格心理学研究, **8**, 55-69.
下斗米 淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究―役割期待と遂行のズレからの検討― 実験社会心理学研究, **40**, 1-15.
佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.
Snodgrass, S. E. (1985). Women's intuition: the effect of subordinate role on interpersonal sensitivity *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 146-155.
Snodgrass, S. E. (1992). Further effects of role versus gender on interpersonal sensitivity *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 154-158.
Swann, W. B Jr., & Read, S. J. (1981). Self-verification processes: how we sustain self-conceptions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 351-372.
山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連―自己概念の分化モデル再考― 実験社会心理学研究, **47**, 118-133.
和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
Wish, M., Kaplan, S. J., & Deutsh, M. (1976). Perceived dimensions of Interpersonal relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 409-420.
Zimbardo, P. G., Haney, C., Banks, W. C., & Jaffe, D. (1977). The psychology of imprisonment: Privation Power and Pathology. In J. C. Brigham, & L. S. Wrightman(Eds), *Contemporary Issues in Social Psychology*. 3rd ed. California: Cole Publishing Company.

註

本研究は第一著者の卒業論文(平成 20 年度大阪大学人間科学部)のデータに加筆・修正を行ったものである。なお、本研究の一部は日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会(2009 年, 大阪大学)において発表された。

対人社会心理学研究, 10, 2010

The effect of role expectation from others on self-evaluation

Toshiki KURAMOTO (*Graduate School of Human Science, Osaka University*)
Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Science, Osaka University*)

We examined how individuals playing a role in social situations would consider the implications of self-evaluation when they were expect to behave in a certain way. Taking into account the realities of social interaction, we investigated experimentally a situation in which the role expected by others was undesirable. We manipulated a scenario in which a teacher gave evaluative feedback to students about learning outcomes. While the confederate played the role of student, participants played the role of teacher. The teacher was instructed to give either negative or neutral evaluations, and the content of expectation given by the experimenter was also manipulated. Participants were 63 female university students. The dependent variables were the Big Five personality factors and the participant's level of self-acceptance. After the interaction, the teachers' impressions of the student were measured in order to explore the relationship between social roles and impression formation. In our results, different aspects of cognitive change arose, depending on the assigned role and the presence of expectation given by the experimenter. For this reason, the nature of cognitive change was discussed further in terms of how expectations were attributed by participants as a perceiver.

Keywords: self-evaluation, social role, role expectation, cognitive dissonance.